

『英華萃林韻府』の術語集をめぐって

宮田和子

本稿は、『英華萃林韻府』（1872）の術語集について考察したものである。『英華萃林韻府』の著者はドーリトル(Justus Doolittle, 1824~1880)、中国名を盧公明という。ドーリトルは聖書の福州語翻訳にも関わっている。

1. 『英華萃林韻府』全2巻の構成

本書の英文書名は *A Vocabulary and Hand-book of the Chinese Language Romanized in the Mandarin Dialect, in Two Volumes Comprised in Three Parts* で、福州、ロンドン、ニューヨーク、サンフランシスコで出版された。中国各地に住む外国人、中国人の英語学習者、外国の中国語学習者を対象とする。2巻3部からなり、第1巻に第1部、第2巻に第2部と第3部を収める。

- 第1巻は、扉、はしがき、発音、本書で使用する北京官話の漢字の発音一覧表、第1部の本文 (pp.1-548)、正誤表からなる。
- 第2巻は、扉、第2巻のはしがき、第3部の目次、第2部の本文(pp.1-174)、第3部の本文(pp.175-688)、正誤表からなる。

1.1 各部の概略

第1部の語彙集が本書の本体を構成し、これだけで完結する。はしがきによれば、漢字175,000字以上を使用、66,000を超える用例を収録し、正書法はウエード(Thomas Francis Wade, 威妥瑪 1818?~1895)の北京官話に拠る。第2巻に南方官話との比較を掲げる。

第2部も英華でいずれも配列はABC順だが、見出し語が異なり、第2部の用例に含まれる漢字語は5字以上のものにかぎられる。また発音表記は第2部にはない。

第3部は、ことわざ、料理、祭、風水などの一般用語のほかに、宇宙、地質、機械、商業、印刷、音楽、数学、天文学などの専門用語を掲げる85項目からなり、領事館員、税関関係者、米・英・独の伝道組織に属する宣教師、その他当時の中国在住者が多彩な情報を寄せている。

ロプシャイト(Wilhelm Lobscheid, 羅存徳 1822~1893)の『英華字典』(1866~69)に訳語と付録を補充した和刻本がある。井上哲次郎が著した『訂増英華字典』(初版1883~85、再版1899、第3版1906¹⁾)がそれで、付録の典拠がこの第3部であり、85項目中22項目を扱っている。『訂増

『英華字典』は当時の大新聞がこぞって宣伝に乗り出し、日本国内のみならず、中国でも大きな反響をよんだ。

当時中国におけるプロテスタント宣教師の布教活動に関する主要な意見交換の場として、*Chinese Recorder* と全国規模で行なわれる宣教師会議 (General Conference of the Protestant Missionaries of China) の二つが挙げられる。しかし、教義上のいきちがいからロプシャイトはこの宣教師会議から破門の憂き目にあった (那須 1998)。日本国内の反響とは裏腹に、ロプシャイトの著作は、『英華字典』のわずか3年後に出版された本書『英華萃林韻府』(1872)では、一顧すら与えられていない。

1.2 第1巻のはしがき

次に掲げているのは『英華萃林韻府』第1巻のはしがきの全訳である。

この仕事に着手したのは、最も有用な中国語のことばに英語を対応させた語彙集を提供したいと思ったからである。そんな語彙集があったらと望む人々の誰もが買えるような値段を設定することも、かねてからの念願だった。予期に反して印刷は半年遅れてスタートした。それに、お気に入りの題目に関連する用語の表やリストの提供をお願いした紳士諸君の寛容な激励もあって、1巻だけという当初のもくろみは崩れ、ここにみられるように2巻3部にまとめることになった。

第1部：第1巻にあってこの語彙集の本体を構成し、これだけで完結する。慎重に見積もって、66,000を超える表現に175,000字以上の漢字が使われている。特定の地域にしか通用しない漢字や、地もとでしか使わない言いまわしはすべて排除し、中国各地に居住する外国人、英語の学習を希望する中国人、さらに他国にあって中国語の学習を志す人々に役立つような語彙集を提供しようというのが狙いだった。

中国語の発音表記は、北京官話の音に基づくウエード式にしたがった。この種の語彙集に載せる漢字の発音表記の基準を、北方官話と南方官話のいずれにすべきかという問題では、意見がわかれた。南方官話を熱心に推奨する向きもあったが、天津での生活を通して北方官話を研究した結果、南方官話を採るわけにはいかなかった。採用していたら、絶えざる混乱と大量のミスを免れることはできなかつただろう。南方官話のほうがいいという方々は、第2巻の南方官話音節表を参照されたい。まえおきのなかで、双方の重要な相違点を指摘しておいた。南北いずれの官話を修得しているにせよ、他方の特徴を理解しておくことは必要である。

次に第1部の基本方針を示す。

- (1) 英語に用いた活字は3種類である。見出し語 (通常1ワード、時に複数のワードからなる) にはゴシック体、見出し語以外に英語がある場合はイタリック体、漢字の発音表記には普通のローマ字を使った。

- (2) スペースを節約するため、見出し語をゴシック体にして、1度だけの表出にとどめた。
- (3) 見出し語を英語の最初の部分に使う場合もあれば、最後に補う場合もある。いずれであるかは文脈によって判断されたい。
- (a) 英語のあとにコンマがある場合は、その英語の前に見出し語を補い、
- (b) 英語のあとにコンマがない場合は、その英語の後に見出し語を補う。
- コンマを省くべき時につけ、逆に付けるべき時にうっかり省いてしまうということがないとはいえない。表や医学用語などについては、前にせよ、後にせよ、見出し語を補う必要がないと文脈から判断できる場合もある。(3)に示した基準を実際に適用する上でこうした例外があることに、学習者はすぐ気づいてくれるだろう。
- (4) セミコロンのあとには前の英語と意味の異なる英語がきて、つねにイタリック体で書かれている。
- (5) 補うべき語が英語の中央にくることも、少なからずある。そういう場合は印刷を工夫して、適切な挿入個所を示すようにした。つまり、ピリオドに続いて大文字で始まる語を後にもってくるというやりかたである。このやりかたはややごちなく、(a)、(b)さもなくば(4)のように、異なる3方法のいずれかを採るのだが、英語の部分が必要である以上、これもやむをえないと判断した。

第2部：第2巻の最初にあり、英語と中国語のフレーズとクローズからなる。第1部と同じくABC順に配列されている。ひとつの表現に含まれる漢字は5字以上のものに限られ、発音表記はない。扱う題材は種々さまざまで、中国語にかなり上達した学習者に役立つだろう。人々の間でよく使われることわざや成句も採りいれている。

第3部：第2巻の最後にある。おおむね専門的なワードやフレーズを扱った表やリストからなるもので、領事館、税関関係者、米・英・独の伝道組織に所属する宣教師をはじめ、中国居住の外国人諸氏の寄稿による。筆者(宮田注：『英華萃林韻府』の著者 Justus Doolittle を指す。以下同じ)が寄稿を依頼したものが主になっている。こうした表やリストのテーマは多種多様で、共通の関心事と重要性をもつものを採りあげた。

寄稿によるもののほかに、時間と機会の許すかぎり、第2巻の有用性がいくらかでも増すようにとの期待をこめて、筆者が選択して編集したものも含めるようにした。

第3部の大半は英語と中国語だが、英・仏・中、英・独・中、英・拉・中で書かれたものもある。1クローズに5、6字以上の漢字を含むものについては、発音を表記しない場合が多い。第3部についての総括的な情報は、第2巻のはしがきと目次を参照されたい。

第1部、第2部それに第3部の一部は、多くの著作から慎重に選んだ。次にその主なものを示す(宮田注：本稿1.4参照)。

参照した著者と著作があまりにも多いので、そのよい点、役に立つ点を多く引き出したには違いないが、同時に間違った点や不備な点を取り込んでしまったことも確かである。とり

こんだもののすべての確証をあげるなどということは、むろん筆者の手にあまる。ミスの中には訂正したものもある。第3部の科学、医学などの分野で独創的な論考を寄せられた諸氏のなかには、概念や事物を規定する際に、第1部の用語とは異なるもの、おそらく第1部よりよい表現、をみつけだしたり、中国に存在しない概念や事物については、新たな表現をつくりだしたりした方々もおられる。こうした論考が特に価値があるのは、扱うテーマに関わる新しいワードやフレーズを具体的に示してみせたという点にあることは、疑う余地がない。

本書はこの印刷所が最初にてがけたものであり、しかも印刷はきわめて不利な条件のもとで行なわれたという事実、大方の注意を促したいと思う。伝統をもつ既存の印刷所の仕事に比べて技術面で劣るといっているのであれば、上に述べた事実が、プロにありがちな批評のための批評をやわらげる役割を果たしてくれるだろう。ロザリオ・マーカル社がこうした印刷を引き受けた勇気は賞賛に値する。漢字のなかには出来合いがないために、金属に彫らねばならなかったものがあり、福州の活字業者としてはこれが精いっぱいのところだった。活字は小さくて、画数の多い漢字を手際よく彫るのは、至難のわざなのだ。

第3部の作成にこころよく手を貸してくださった方々(うち何人かの方々には面識がない)にはお礼の申しあげようもない。貴重な寄稿のみならず、激励と示唆に富んだおことばを頂戴した。心から感謝の意を表したい。

また、S.W.ウィリアムズ師は、数々のご提言に加えて、寛容にも貴重な資料を自由に使うことをお許しくださった。こうした資料の一部は第1部に組みこまれている。改めて謝意を述べたい。

1872年1月1日 於福州 J.ドーリトル

1.3 第2巻のはしがき

次に掲げているのは『英華萃林韻府』第2巻のはしがきの全訳である。

第1巻のはしがきに示したもの以外に参照した文献のうち、記載の価値ありと認めたものを次に記す。

J. Summers	<i>A Handbook of the Chinese Language</i> (宮田注: 1843 刊)
J.F. Davis	<i>Chinese Moral Maxims</i> 『賢文書』(宮田注: 1823 刊) マタイによる福音書 5, 6, 7 章の官話訳 2 種
G.C. Stent	<i>A Chinese and English Vocabulary in the Pekinese Dialect</i> (宮田注: 『漢英合璧相連字彙』1871 刊) (第3部 70 項の最初の 8 ページに使用した。)

第2部: 第2巻の最初の 174 ページを占める。5 字以上の漢字のフレーズ(句)とクローズ(節)、その英語訳からなり、ローマ字による発音表記はない。英語の配列は第1部の基本方

針に沿っている。見出し語は、クローズやセンテンスの最初にこようが、最後にこようが、あるいは中央にこようが、1行目のはじめにゴシック体で書かれる。見出し語のあとにコンマがある場合は、その語は英語のクローズやセンテンスのはじめにはこないことを意味する。見出し語が英語のクローズやセンテンスの中央にくる場合は、ピリオドに続いて大文字を用いて、そのクローズやセンテンスの始まる位置を示す。クローズやセンテンスの終わりにコンマがない場合は、見出し語をその位置に補えば意味が完結することを表す。

第2部は10,000を超える英語のクローズやセンテンスとそれらに対応する中国語を掲げ、75,000以上の漢字を使用している。扱うテーマが多いので、200から300程度を異なる見出し語のもとで繰り返し使っている。

第3部：第2巻の175ページから始まり、中国在住の外国人諸氏からの寄稿と、本書第1巻と第2巻のはしがきに述べた諸著作から選んでまとめたもの、あるいは筆者が作成したもののよって構成される。第3部の性格と範囲、寄稿者名については、第3部の目次を参照されたい。寄稿を通して、あるいは校正に手を貸すことで協力してくださった方々に、心からの謝意を捧げる。

万やむをえぬ事情により、春と夏の第2巻の印刷は予定より大幅に遅れた。9月筆者が上海に移転する時点では、福州で印刷が終わったのは480ページに過ぎなかった。残りの印刷はここ上海の長老会の印刷所で行なわれた。481ページ以降の活字が異なるのはそのためである。

1.4 使用された文献

第1巻のはしがきに「第1部、第2部、第3部の一部は多くの著作のなかから慎重にえらんだ。つぎにその主なものを示す」という断り書きがある(本稿1.2.参照)が、原文には書名と著者名の一部をメモ程度に載せているにすぎないので、ここではそれを補い、実際に使用したと思われる文献とその刊年を付した。

S.W. Williams	<i>An English and Chinese Vocabulary in the Court Dialect</i> 『英華韻府歴階』 1844 <i>A Chinese Commercial Guide</i> 4 th ed. 1856 <i>Easy Lessons in Chinese</i> 『拾級大成』 1842
W.H. Medhurst	<i>English and Chinese Dictionary</i> 1847~48 <i>Chinese Dialogues</i> (rev. ed.) 1863
R. Morrison	<i>A Dictionary of the Chinese Language</i> 『中国語字典』 1815~23
B. Hobson	<i>A Medical Vocabulary</i> 『医学英華字訳』 1858
J. Edkins	<i>A Grammar of the Chinese Colloquial Language, commonly called the Mandarin Dialect</i> , 2 nd ed. 1864 <i>Progressive Lessons</i> 1862
T.F. Wade	<i>Colloquial Series</i> 『語言自邇集』・ <i>Documentary Series</i> 『文件自邇集』 1867 ²
J. Chalmers	<i>An English and Cantonese Pocket Dictionary</i> 『英粵字典』 1859, 1862, 1872

J. Macgowan	<i>A Manual of the Amoy Colloquial</i> 『英華口才集』 ³
E.C. Bridgman	<i>A Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect</i> 1839
C.C. Baldwin	<i>A Manual of the Foochow Dialect</i> 1871
F.P. Smith	<i>Chinese Materia Medica</i> ⁴
E.J. Eitel	<i>Hand-book for the Students of Chinese Buddhism</i> 1870
J.M. Callery	<i>Systema Phonicum Scripturae Sinicae</i> 1840
(tr.) W.C. Hillier	The Chronicles of Cash ⁵
(tr.) J.G. Bridgman	<i>Notitia Linguae Sinicae</i> 1847
	<i>The Hongkong Directory</i> ⁶
	<i>The Customs Reports</i> ⁷
	<i>Journal of the North China Branch of the Royal Asiatic Society</i> 1860 ⁸
	<i>Notes and Queries on China and Japan</i> ⁹
	福州と天津で集めた手稿 現地教師
(*)J. Summers	<i>A Handbook of the Chinese Language</i> 1863 ¹⁰
(*)J.F. Davis	<i>Chinese Moral Maxims</i> 『賢文書』 1823 ¹¹ マタイによる福音書 5, 6, 7 章の官話訳 2 種
(*)G.C. Stent	<i>A Chinese and English Vocabulary in the Pekinese Dialect</i> 『漢英合璧相連字彙』 1871 (第 3 部 70 項 『賢文書』 の最初の 8 ページに使用)

(*)第 2 巻のはしがきに書かれた参考文献を示す。

2. 術語集

第 3 部 (pp.175-688) は前述のように (本稿 1.1 参照)、領事館・税関関係者、米英独の伝道組織に所属するプロテスタント宣教師をはじめ、当時の中国に居住していた外国人の寄稿からなっていて、本書『英華萃林韻府』の著者 J.ドーリトルが依頼したものが主体をなしている。第 3 部の大半は英語と中国語だが、英・仏・中、英・独・中、英・拉・中で書かれたものもあり、井上哲次郎『訂増英華字典』は英語と中国語の部分だけをとりあげている。

第 3 部は一般用語を含む 85 項目を扱う。そのうち術語集を構成する 21 項目をつぎに掲げる。数字は項目の順序をしめす。原著のローマ数字は、そのまま現行のアラビア数字になおした。発音のローマ字化は、少数の例外を除いて、著者ドーリトル自身が担当している。

1 機械用語、特に蒸気機関について； 3 外交その他公的立場での交流に用いる表現； 11 鉱物、地質； 13 文法； 15 地理学用語； 16 印刷用語； 17 税関用語； 18 料理； 20 商業

用語；21 薬剤；22 解剖・生理にかかわる表現；23 音楽用語；24 自然哲学用語；25 自然科学用語；27 写真用薬品と装置；32 数学及び天文用語；38 宗教・神学関係用語；62 写真用語；64 化学用語；72 犯罪・刑罰・訴訟に関する表現；78 仏語・中国語・英語による機械及び海事用語

3. マティアについて

次に、術語集に「音楽用語」を提供している者の一人であるマティアの略歴を述べたい。マティアの妻ジュリア・ブラウン・マティア (Julia Brown Mateer) は、術語集の音楽用語を担当しているが、音楽用語を事実上創出したのは、夫の C.W. マティアであった¹²。

マティア(Calvin Wilson Mateer, 狄考文 1836~1908) は1836年1月9日ペンシルヴァニア州で、7人の子(男5人と女2人)の長男として生まれた。1875年父はイリノイ州で死去し、マティアは教育熱心な母親の影響を強く受けて成長した。幼年期、校長のダフィールド(J. Duffield)に数学の才を見出されたことが、その後のマティアの知的発展の基礎となった。17歳のときラテン語とギリシャ語の勉強をはじめますが、経済的に困窮して一時郡校で教鞭をとり、1855年秋ペンシルヴァニア州 Jefferson College に入学した。1857年から1858年の冬にかけて、大覚醒の波が全米を席捲、大西洋を越えて神学生に大きな衝撃を与え、異教徒の国々に対する布教熱がわきあがった。マティアは宣教師になる決意を固め、1861年4月長老会に申請して許可された。母親からも承諾の手紙が寄せられたが、南北戦争が勃発したため、2年後までアメリカを離れることはできなかった。1862年ジュリア A.ブラウン(Julia A. Brown) と結婚¹³。1862年9月山東の貿易港登州への配属が決定した。1863年7月3日夫人をともなってニューヨークを出航し、喜望峰をまわって東進、北上して上海に到着、上海から山東半島の芝罘に向かい、1864年1月上旬任地の登州に着いた。1863年当時はスエズ運河が開通したばかりで、大陸横断の鉄道もまだ敷かれていなかった。登州は1860年天津条約により開港した人口7万余の小都市で、浸礼会について長老会もここを伝道拠点としていたが、盗賊の襲撃とコレラの流行で荒廃し、2名の宣教師を残すのみとなっていた。妻ジュリアは31年間この地で過ごしたのち他界する¹⁴。

マティアは教育者としても有名で、中国の近代科学の発展に貢献した¹⁵。1880年マーティン(William Alexander Parsons Martin, 丁隴良 1827~1916)、ウィリアムソン(Alexander Williamson, 韋廉臣 1829~1890)、フライヤー(John Fryer, 傅蘭雅 1839~1928)、アレン(Young John Allen, 林樂知 1836~1907)とともに教育連合と、それに所属する教科書委員会(School and Textbook Series Committee)を結成し、教会学校で使用する教科書の編集に精力を傾注した。科学関係の教科書としては、これが中国語で書かれた最初のもつとされる。1890年までに教育連合が出版した学校用書籍は98点にのぼる。数学関係のマティアの訳書に『筆算数学』『形学備旨』がある¹⁶。

マティアが登州に創設した学校は、のち発展して登州カレッジ(文会館)となった¹⁷。1881年弟のロバートが登州拠点の活動に加わる。1892年 *Mandarin Lessons* を刊行して、好評を得た¹⁸。

Chinese Recorder に掲載された一連の論文は改訂され、1900年 *A Review of "Methods of Mission Work"* と題して出版された。編集者の要望をいれてネヴィアス (John Livingston Nevius, 倪維思 1829~1893) の活動方針を批判したもので、最低の費用で最高の布教をと説いたこの本は、経済的苦境にあえぐ長老会に歓迎された¹⁹。

登州印刷所の運営を軌道にのせ、フィッチ(G.F. Fitch) を長とする新しい印刷所の経営を弟にゆだねる。この印刷所は長老会に限らず、他の宣教機関を含む中国全土の布教活動の中心として機能するようになる。マティアは出版事業にたずさわる一方、官話訳聖書の改訂に従事し、さらに化学、物理、天文学、音楽、印刷、機械、神学などに関わる特殊用語の収集と創出につとめた²⁰。現地では西欧の算数に対する要望が高まり、平易なことばで書かれたマティアの本には、多くの海賊版があらわれた。1908年1月、マティアはアメリカの大学版に相当する代数学第2巻の序文を書きあげ、やがて完成させた²¹。北京在住のグッドリッチ(Chauncey Goodrich, 富)²²との共編で官話辞典の出版を企画する一方で、*Pilgrim's Progress* 『天路歷程』の官話訳もすすめていたが未完成に終わり、1908年9月28日青島の病院で死去した。73歳であった²³。なお、マティアが再婚した A.H. Mateer は、*New Terms for New Ideas –A Study of the Chinese Newspaper* (1924) の著者として知られている。

参考文献

- J.F. Davis, 1823, *Chinese Moral Maxims with a Free and Verbal Translation Affording Examples of the Grammatical Structure of the Language*
- Eliza Morrison, 1839 *Memoirs of the Life and Labours of Robert Morrison, D.D.* London: Longman, Orme, Brown, Green, and Longmans
- G.T. Staunton, 1856, *Memoirs of the Chief Incidents of the Public Life of Sir George Staunton. Bart.*, London
- Records of the General Conference of the Protestant Missionaries of China, Held at Shanghai, May 10-24, 1877, 1878*, Presbyterian Mission Press, Shanghai,
- H.S.C. Nevius, 1895, *The Life of John Livingston Nevius, For Forty Years a Missionary in China*, Fleming H. Revell Co., New York
- C.W. Mateer, 1900, *A Review of "Methods of Mission Work"* [Rev. John L. Nevius, D.D.], Presbyterian Mission Press, Shanghai
- D.W. Fisher, 1911, *Calvin Wilson Mateer, Forty-Five Years a Missionary in Shantung, China*, Westminster Press, Philadelphia
- R.M. Mateer, 1912, *Character Building in China-The Life-Story of Julia Brown Mateer*, Fleming H. Revell Company,
- A. Wylie, 1966, *Chinese Researches* Cheng-wen Publishing Co., Taipei
- 1967, *Memorials of Protestant Missionaries*, Cheng-wen Publishing Co., Taipei
- R. Covell, 1986, *W.A.P. Martin, Pioneer of Progress in China*, Christian University Press

- 石田幹之助 1942 『欧米に於ける支那研究』 創元社
 魏外揚 1995 『宣教事業与近代中国』 宇宙光出版社
 吉田寅 1997 『中国プロテスタント伝道史研究』 汲古書院
 那須雅之 1998 「LOBSCHNEID の《英華字典》について一書誌学的研究(2)」 『文学論叢』 第 116 輯 愛知大学文学会
 宮田和子 1999 「井上哲次郎『訂増英華字典』の典拠一増補訳語を中心に一」 『英学史研究』 第 32 号 日本英学史学会
 2000 「井上哲次郎『訂増英華字典』の典拠一動詞の自他、分詞、付録を中心に一」 『或問』 第 1 号
 高田時雄 2001 「トマス・ウェイドと北京語の勝利」 『西洋近代文明と中華世界』 京都大学学術出版会
 温雲水 2007 「初探「富善字典」(刪節稿)」 『16-19 世紀西方人的漢語研究』 関西大 CSAC
 沈国威 2007 「中国近代的科技術語辞典(1858~1949)」 『或問』 第 13 号

注：

¹ 井上哲次郎『訂増英華字典』は、ロブシャイト『英華字典』(1866~69)の増補版で、第2版と第3版の本文は同じである。また初版と第2・第3版の本文の異同の大部分は、改行位置の相違によるもので、ページ数も変わらないことから、両者のあいだに実質的な差はないといえる。『訂増英華字典』の増補訳語の漢字語については宮田 1999、増補された英語とウェブスター辞書との関連、および付録と『英華萃林韻府』の関わりについては宮田 2000 で、それぞれ述べた。

² 高田時雄 2001:131 を参照。第3版は 1903 刊。

³ J.Macgowan 『英華口才集』の初版と再版は未見。3版は 1892 刊。

⁴ 「何年も前にスミス(F. Porter Smith) 氏が *Chinese Materia Medica* を出した。不備な点が多かったが、当時この種のもは他になかった。(中略) 中国における宣教活動の初期のもので、必要とする人はほとんどいなかったが、小型本が印刷された。絶版になってからかなり経つ。」(*Chinese Materia Medica* 1911 版はしがき) とあるが、初版の刊年は不明。

⁵ *The Chronicles of Cash* (錢志新編) は未詳。訳者は、『語言自邇集』第2版(1886)と第3版(1903)の共編者ヒリアー(Walter Caine Hillier, 1849~1927) と思われる。

⁶ 1011:*The Hongkong Almanack and Directory for 1846* を指す(?)。 *Catalogue of the Library of the China Branch of the Royal Asiatic Society 3rd. ed.* 1894 に関連記事がある。注のはじめの数字は同書のシリアルナンバーを示す。

⁷ 1270~1272:*The Customs Reports* : 上海の税関統計部が発行したもので、条約港における貿易収入の年次報告と統計資料を列挙している。 *Catalogue of the Library of the China Branch of the Royal Asiatic Society 3rd.ed.* 1894 に関連記事がある。注のはじめの数字は同書のシリアルナンバーを示す。

⁸ *Journal of the North China Branch of the Royal Asiatic Society* は、上海の英国王立アジア北支支部(The North China Branch of the Royal Asiatic Society) が 1858 年に創刊、一時中断したが 1864 年 12 月から駐支公使パークス(Harry Smith Parkes, 1828~1885) を中心に再刊した(石田幹之助 1942:104-112)。

⁹ *Notes and Queries on China and Japan* は、デニス(Nicholas Belfield Dennys) 編集。1867 年 1 月 31 日

に創刊され、1870年10月3日の第4巻10号まで続いた。第4巻だけはデイヴィーズ(C.Langton Davies)が編集を主宰した(石田幹之助 1942:117-118)。

¹⁰ *A Handbook of the Chinese Language* 1863 は、ロンドンの King's College におけるサマーズ(James Summers)の講義に参加して中国語を学ぶ学生、あるいははじめて中国について学ぼうとする人びとのために編集したテキストである。欧米で中国語の研究が始まったのは最近のことで、誤解や幻想が横行していると、サマーズは警鐘を鳴らしている。マーシュマン以前に読むに値する本は出ていないといい、R. モリソンの文法書(1815)は、急いで印刷したためと、モリソンの入華以来日が経っていないことから、精読してもたいした効果は得られないとし、メドハーストについての批評も大雑把なものでしかない。しかし、清国の箴言や諺を解説したデーヴィス(John Francis Davis)の『賢文書』(1823)は推奨に値すると評価している。

¹¹ デーヴィスの『賢文書』はまず英本国の図書館に送られ、ウィルキンズ(Dr. Wilkins)の推薦によって中国に送り返され、東インド会社で印刷に付されることになった。献辞は東インド会社理事ストーントン(G.T. Staunton)卿に捧げられている。デーヴィスはこれを、現地の人びとが尊敬の念を持って引用するところから、常に念じて日々の行為の反省の糧とすべきものと考えた。その大部分が道徳的な内容をもっている。

なおデーヴィスとストーントンは親交があった。のちの香港総督デーヴィスの爵位取得を強力に後押ししたのも、ストーントンである。ストーントンが帰国の船中で英訳を完成させた『大清律例』(Penal Code)は好評を博し、欧州各国語に訳された。最古の英華・華英字典である『中国語字典』(仮称、1815~23)の著者モリソン(R. Morrison)とのあいだに築かれた深い友情は、生涯変わることがなかったといわれる。

¹² 音楽用語について：共著にしようともちかけたことは一度もなかったが、特に適切なことばを創出するという点で、マティアはジュリアの“Music Book”におおいに関わっていた。(He(=C.W. Mateer) had a good deal to do with Julia's “Music Book”, especially in coining appropriate terminology, though he never claimed joint authorship in it.(D.W. Fisher, 1911:161))

¹³ マティアの出生から最初の結婚まで：D.W. Fisher 1911:15-21,30-33, 46-53

¹⁴ 喜望峰をまわって任地へ。ジュリア他界：D.W. Fisher 1911:56-80; *The Chinese Recorder* (以下 CR と略称) vol.29:218-222 にジュリアの略歴が載っている。ジュリアは mandarin を上手に話した。人名、場所、日付の記憶にすぐれ、現地教会に関係する家族の状況を的確につかんでいた、という。

¹⁵ 近代科学の発展に貢献。エピソード：マティアは装置や機械を作るのも使うのも得意であった。そのため却ってなんでも屋(jack-of-all-trades)という異名もとった。再婚した妻(Mrs. Ada Mateer)によると、大工仕事の部屋に加えて脇部屋をつくったという。2階はできあがった装置の保管と、ペンキ、ニス塗装、乾燥部屋にあてられた。1階が主な作業場で、天井から床まで工事用の材料であふれていた。『万国公法』の漢訳者マーティン(W.A.P. Martin)は、1908年12月の *Chinese Recorder* に、登州のマティアの自宅を訪問したとき、マティアが科学装置を作っていたり、アメリカの雑誌にでていた数学の問題と格闘しているのを目撃したと書いている(D.W. Fisher, 1911:236-240, 249)。

¹⁶ 教科書の編纂：魏外揚 1995:85

¹⁷ 登州・山東カレッジ設立の経緯と発展状況については D.W. Fisher, 1911:130-235; 中国語の呼称の改

変については CR vol.47:861,862 に詳しい。

¹⁸ *Mandarin Lessons*: D.W. Fisher, 1911:167, 168

¹⁹ *Methods of Mission Works*: ネヴィアス (John L. Nevius) は、1886 年から 1887 年にかけて *Methods of Mission Works* と題する論文を *Chinese Recorder* に投稿、やがて一連の論文は改訂、出版された。売り切れになると長老会本部では再度印刷して、普及を図った。人気があってよく売れたが、ネヴィアスのお膝元で、もっともよく事情に通じているはずの山東からは、度重なる問い合わせにもかかわらず、回答はなかった。真相を公表してほしいというマティアへの要請は、山東からもほかからも寄せられた。調査の結果は、ネヴィアスのデータは不完全であり、例外的な事例を一般的なものとして取りあげるなど、誤謬と偏見に満ちていて、布教の拡大には重大な障害となるものであることがわかった (C.W. Mateer, 1900:1-5)。 *Methods of Mission Works* の最初の出版から 10 年が過ぎていた。マティアは苦悩の末真相の公開に踏みきった。

²⁰ 専門用語の収集と創造 : D.W. Fisher, 1911:159

²¹ 算数関連の本にマティアは 1868 年以來取り組んできた。西歐式の横書きにするか、中国の流儀にしたがって縦書きにするかで迷ったが、教科書の数字は縦書きにした (D.W. Fisher, 1911:162)。

1900 年の義和団事件以後になされた、ミッションスクール以外の中国人教師や生徒からの最初の要望は、西洋の算数 (western arithmetic) であり、時宜をえたマティアの本には多数の海賊版が現れた。当時の中国の出版社に著作権という概念はない (The publishers had not yet learned the significance of “copyright”)。上海の印刷所からも数えきれないほど多く売れた (D.W. Fisher, 1911:162,163)。

1884 年 10 月マティアは教育連合の教科書委員会 (school-book committee) に幾何学についての手稿を提出した。手稿は浅文理 (plain wen-li) で書かれ、数学記号を先進国の共通語 (universal language) と位置づけて使用した (D.W. Fisher, 1911:163)。

1882 年 3 月には代数学の手稿を同委員会に提出、1908 年 1 月 14 日には代数学第 2 巻の序文を印刷所の管理者に提出した。これはアメリカの大学版に相当する。完成は死の数ヶ月前のことだった。(D.W. Fisher, 1911:163)

²² 中国人の漢字名に 1 字のものは少ないとされるが、A. Wylie 1967 には頻出する。富 (Chauncey Goodrich, William Robert Fuller)、江 (George Crombie)、白 (S.P. Barchet)、梅 (John Mara)、阿 (W. Atkinson)、文 (George Sydney Owen) など。

²³ 未完成に終わったもののなかに *Mandarin Dictionary* (官話辞典) がある。北京のグッドリッチ (Chauncey Goodrich) との共同編集を企画していたもので、1874 年 6 月 6 日付のグッドリッチ宛ての手紙につぎのようにある。

私が思い描いている本は、北支の口語を片端からとり入れた辞書です。一方では人びとが日常生活で使う方言的表現を含めて、——直隸や山東、官話を話す省で使われる方言を、むろん現地のものとわかる範囲でのことばや言い回しに留意しながら、できるかぎり採集します。さらに、その特徴として既製のイディオムを取り込み、2 字以上の漢字語を採集するようにしましょう。2 字以上の漢字が組み合わされると、意味がひとつに溶け合って、個々の漢字の訳とはちがうものになるのですから。(My idea of the book is a dictionary of the spoken language of north China, in all its length and

breadth, including on the one hand all the colloquialisms that the people use in everyday life, ---all they use in Chi-li and in Shantung, and in all the Mandarin-speaking provinces, so far as we can get it, noting, of course, as such, the words and phrases we know to be local. Further, let it include as a prominent feature all sorts of ready-made idiomatic phrases, and in general all combinations of two or more characters in which the meaning coalesces, or varies from the simple rendering of the separate characters. (D.W. Fisher, 1911:165))

予備段階の仕事はほとんど終わっていたが、夫人が亡くなった結果グッドリッチがパートナーを辞め、ついでマティアも編集企画を放棄した。しかし1900年マティアは2118字の漢字の分析結果を公表した。こどもの漢字の書き取りに役立てようとしたものである(D.W. Fisher, 1911:165)。

Mandarin Dictionary (官話辞典)は未完成に終わった。しかしグッドリッチとの共同作業の過程でできたものに次の3点がある。いずれも手稿(D.W. Fisher, 1911:166)。

①グッドリッチの最初の Chinese phrase book

②グッドリッチの Pocket Chinese-English Dictionary (これはおそらく温雲水2007のいう‘富善字典’ (*A Pocket Dictionary (Chinese-English) and Pekinese Syllabary*)の基礎となった手稿であろう。)

なお、ワイリー1967:274はグッドリッチの中国名を‘富善’ではなく、‘富’としている。同時代に活躍したワイリーの掲げるプロテスタント宣教師の中国名には、1字だけのものが多数含まれているので(上述)、温雲水氏の‘富善’は Goodrich を現代風に中訳したものではないかと推測する。

③中国語で書いたマティアの手稿。(One insurmountable difficulty encountered was phonetic arrangement commanding common usage. None had the requisite approval. 最大の難関は、普通の言い回しの発音表記をどうするかという問題だった。必要条件を満たして公認されたものは、ひとつとしてなかったのだから。) (D.W. Fisher, 1911:166)。

1907年2月26日の手紙に、バーゲン(Bergen)が学長を辞め、代わりの人物が見つかるまで、マティアが臨時の学長をつとめることになった、とある。学生数は181名に増加したが、1907年10月27日の同僚宛の手紙で、マティアは大学の運営から完全に身を退いたことを伝えている(I am now free from any cares or responsibility in educational matters”) (D.W. Fisher, 1911:229)。マティアの葬儀の際、参列者がマティアの功績をたたえて、卒業生数の統計を読みあげるといふ異例のできごとがあった。卒業できなかった者約200名という。以後カレッジは順調に発展していく(D.W. Fisher, 1911:232-251)。